

12年前の東日本大震災を全国の人に伝える

磐梯山噴火記念館 館長 佐藤 公
 福島県立博物館 学芸員 筑波 匡介
 福島大学 特任准教授 瀬戸 真之

プロローグ

2020年2月13日の高知市で開催されていた全国科学博物館協議会の夜の交流会の会話から「東日本大震災」を全国の人々に伝えなければという思いが込み上げてきた。

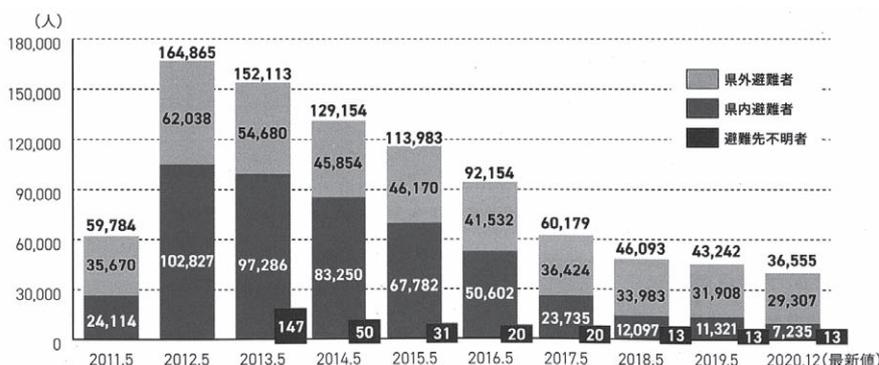


図1 福島県における避難者の推移

全国から参加している科学博物館の学芸員と話をしている時、「東日本大震災からまもなく9年も経つのだから、福島県も復興したのでしょうか」と言われた。福島県は岩手県や宮城県とは異なり、地震災害や津波災害だけ

でなく、原子力災害が継続している県で、その頃、原発周辺の双葉郡の自治体では、4万人以上が自宅に戻れていない状況にあった（図1）。

東日本大震災から数年は、マスコミは連日のように報道をしていた。しかし、時間とともにその情報は減少し、被災3県はだんだん忘れ去られていくことになった。

そこで私は「今の被災地を知らない学芸員の皆さん、東京電力の福島原発周辺を見に来ませんか」と声掛けをしていた。

1. 勉強会の開催

全国から科学博物館の学芸員に来ていただくためには、私一人では対応できないため、志を同じくする筑波匡介さん（福島県立博物館：以下県博と表記）と瀬戸真之さん（福島大学：以下福大と表記）に相談した。

その話し合いの中で、県外の学芸員の訪問も重要だが、それ以前の問題として、福島県内の

博物館の学芸員が意外と原発周辺には行っていないのではないかということになった。震災発生直後に博物館資料のレスキューに関わった人たちは、何度となく原発周辺を訪れているが、それ以外の学芸員は訪れる理由がなかった。

そこで、手始めに福島県内の学芸員を集めた学習会を原発周辺で開催することにした。

① 2020.11.9 防災教育フォーラム

「博物館が地域で生きる力を育むために、みんなでつくる・考える防災教育」というテーマで、開館まもない東日本大震災・原子力災害伝承館（双葉町）〔以下、原発災害伝承館と表記〕で開催した。金井昌信群馬大学教授に基調講演「博物館ができる、防災を手段とした地域教育」をお願いし、午前中には津波被害のあった浪江町立請戸小学校を見学し、生徒たちが避難した大平山へも出かけた。

② 2021.8.26 震災遺産・震災遺構に関する勉強会

会場は富岡町の公民館で行った。被災した岩手県や宮城県では震災に関する伝承施設や資料館が多数建設され、遺構の公開や活用が進められている。そういった先進地に学びながら私たち福島県のあるべき姿を共有し、見出すための勉強会を開催した。講師に3.11 伝承ロードの山崎麻里子氏を招き、震災遺構の保存や活用について講演していただいた。私からは「災害遺構の先進地事例」というテーマで、1991年に噴火した雲仙普賢岳と2000年に噴火した有珠山の事例を紹介した。合わせて、開館まもない富岡町アーカイブミュージアムを見学した。

③ 2022.4.13 災害の継承に関する勉強会

会場は原発災害伝承館で行った。「31年前の雲仙普賢岳の災害をどのように伝えてきたのか」というテーマで雲仙岳災害記念館の杉本伸一館長に講演していただいた。私からは「134年前の磐梯山の噴火をどのように伝えているか」について話をした。県博の筑波さんは「福島県立博物館の震災伝承・防災教育」について話をした。福大の瀬戸さんは「11年前の東北地方太平洋沖地震をどのように伝えているか」について話をした。福島県で初めて震災遺構になった浪江町立請戸小学校の見学も行った。

2. 東日本大震災の企画展

勉強会をする中で、筑波さんと瀬戸さんと話すうちに、東日本大震災を地元でも伝えるために、磐梯山噴火記念館（以下、当館と表記）で企画展を開催することが有効ではないかとなった。県博では節目節目に東日本大震災の企画展を開催してきた。原発災害伝承館では常設展示として、東日本大震災を伝えている。この2館以外では、南相馬市博物館の企画展「南相馬の震災10年」などが開催されている。



図2 いわき市豊間中学校の
体育館の時計



図3 南相馬市の牛舎の柱
(牛がかじった)

2つの博物館で持っている東日本大震災に関する資料の中から下記の資料を選択した。

- ① 地震災害： 体育館の落下した照明器具
- ② 津波災害： 津波襲来で止まった時計（図2）・避難を呼びかけていたパトカーのドア
- ③ 原子力災害： 下履きが残る小学校の下駄箱・フレコンバッグ・防護服
オフサイトセンターに残されたホワイトボード（複製）
牛が齧った牛舎の柱（複製）（図3）・サーベイメーター（線量計）
中間貯蔵施設への運搬トラックの標識・ゲート入口に設置された看板

それぞれに特徴のあるもので、当館の企画展示室に展示できるサイズのものを選んだ。

当館ではこの災害に関する実物資料がないため、パネルを6枚作った。

a. 「石巻市立大川小学校」

東日本大震災で最も被害の大きかった学校だが、なぜ子供たちの命を守れなかったのかについて解説

b. 「釜石市の奇跡と悲劇」

東日本大震災では、ほとんどの子どもたちが津浪から逃げて助かり、釜石の奇跡と言われたが、多くの大人が亡くなっている事実を解説

c. 「浪江町立請戸小学校」

太平洋から400mに位置するこの学校では全員が避難し助かった。高台に行く近道を知っていたのは4年生で、そのために短時間で避難できた

d. 「浪江町津島地区とSPEEDI」

福島第一原子力発電所から20km北西にあるこの津島地区へは、原発災害発生後に多くの住民が避難した。しかし、放射能は南東の風の関係で、この津島地区に多く流れた。SPEEDIという放射能の分布を予測するシステムは地元には知らされなかった。

e. 「震災遺構と防災教育」

広島原爆ドームは戦争終結から20年後に保存することが決まった。宮城県の南三陸町防災庁舎は、宮城県知事が20年間預かるということで、解体を免れた。東北の被災4県（青森・岩手・宮城・福島）では、3.11 伝承ロードという組織を作り、災害の伝承のネットワークを図っている。

f. 「東日本大震災からの復興は」

東北から遠い地域の人たちは、被災地は既に復興していると勘違いをしている。福島県は地震と津波以外に原子力災害で、その周辺に住んでいた人たちが11年後の現在でも3万人以上が帰還できていない。当然、地元でも復興はなかなか進まない。それが現実なのである。



図4 シンポジウム

この企画展に合わせて、私たち3人が講師となるシンポジウム「東日本大震災から11年 福島県」を猪苗代町で開催した。私は「津波災害と津波防災教育」について。筑波さんは、「震災遺産と問い ～災害伝承の持続可能性について～」。瀬戸さんは「東日本大震災にみる災害伝承」について話をした。

参加者のアンケートからは、災害から11年が経過する中で、福島県内では様々な問題が発生していることを理解できたこと（図4）。



図5 南押原中学校の生徒に解説

この企画展の最中にいくつかの学校が当館を訪れ、私から東日本大震災のレクチャーを受けて、企画展を見学した。

企画展初日の9月17日に訪れたのが、栃木県鹿沼市の南押原中学校であった。「磐梯山と東日本大震災」という1時間の講義の後、企画展示室で解説をした。牛舎の柱が細くなっているのは、原発災害で避難できなかった牛が餌が無くなりかじったものであること。東日本大震災では多くの犠牲者が出たが、多くの生き物も犠牲となっていたことを話した

（図5）。生徒の感想では、9月30日には地元猪苗代町の緑小学校が訪れ、「磐梯山ふん火と私たち」という1時間の講義の後、企画展示室で解説をした。10月4日には地元北塩原村の裏磐梯中学校の防災の授業を当館で実施した。この学校の防災授業を私は21年前から継続して担当していて、今年のテーマは「東日本大震災と気象災害」で1時間の講義の後、企画展示室で解説をした。10月20日には福島県内の2つの高校が訪れた。郡山市にある安積高校と南会津町にある南会津高校で、各30分で磐梯山の話をした後に、企画展示室で解説をした。11月15日には地元の裏磐梯小学校が訪れ、「東日本大震災と気象災害」で1時間の講義の後、企画展示室で解説をした。11月22日には裏磐梯エコツーリズム協会の大人向けの講座で「東日本大震災と気象災害」で1時間の講義の後、企画展示室で解説をした。

3. 原発周辺ツアーの開催

福島県内の学芸員を原発周辺に案内する学習会やツアーを実施する中で、県外の学芸員を呼ぶことに確信が持てるようになった。

4. 科学博物館が大規模災害をどのように伝えていくべきか

大規模災害を経験している地域は、今のところ、2011年の東日本大震災を経験している岩手県と宮城県と福島県と1995年の阪神淡路大震災を経験している兵庫県くらいである。この4県以外の都道府県の科学博物館で大規模災害を伝えることが重要である。

日本という国は、世界で10数枚しかないプレートが4つもぶつかっている所に位置している。そのため、過去に何度となく地震や津波や火山噴火でいためつけられてきた。ただし、大規模災害は近年では1995年と2011年の2つしかない。死者が5千人を超える災害は、1995年の前は1923年の関東大震災までさかのぼる。つまり、昭和の時代は、大規模な災害は発生していないのである。

私たちは文明が進めば、巨大災害は発生しないと思い込んできたが、平成に入ってから死者が5千人を超える災害が2回も発生してしまった。つまり、どんなに文明が進んだとしても、私たち人間の力で巨大災害を止めることはできないのである。では何をすればよいのか、それは過去の災害に学び、いかに早くその災害から避難することなのである。物的な被害は、いつかは再建できる。ただし、原子力災害は別である。災害発生から12年になろうとしているが、メルtdownした核燃料を未だに回収すらできていない。30年程度で廃炉作業を終了すると東京電力は言っているが、毎年のようにその工程は先延ばしされているのが現実である。

人命の被害は再建できないことを私たちは肝に銘じたい。

過去の災害を学ぶことで、次の災害の備えとなる。それを災害の実物を見ることで、より心に刻むことが可能である。

ぜひ、全国の科学博物館で私たちが作成した「東日本大震災」の展示物を展示してほしい。もし、展示していただければ、私たちはその企画展の最中に訪問し、シンポジウムのお手伝いをすることもできる。

また、東日本大震災に関しては福島県だけでなく、宮城県や岩手県も訪れてほしい。青森県も含めてこの4県では、3.11 伝承ロードという組織を作り、全国からの訪問客への対応をしている。より多くの被災地を回ることで、同じ地震や津波でも、その地域ごとに災害対応が異なっていたことを学べる。

次年度の早い時期にツアーを具体化したいと考えている。1回だけで終わらせず、希望があれば何度も実施したい。段階的には、原子力災害伝承館にツアーのパッケージ化をお願いする方向にもっていきたい。福島県原発災害の現場を見て、東日本大震災について、もう一度考えてみませんか。